

Girl on Mom Novel

MY SUBSTITUTE HUSBAND



～ 娘は私の身代わり夫 ～

作:みずいろめがね

MY SUBSTITUTE HUSBAND ～娘は私の身代わり夫

作：みずいろめがね

♡目次♡

Heart♡1 見放された女

Heart♡2 カレッジの女友達

Heart♡3 母親のマスターベーション

Heart♡4 娘が母を想う時

Heart♡5 ヘルマ・フローリー

Heart♡6 母親誘惑作戦

Heart7♡ アマゾネス Inc.

Heart8♡ 開かれた扉

Heart9♡ わたしはママの身代わり夫

Heart10♡ そしてふたりは夫婦になる

☆あとかき☆

★ご注意★

- ・この作品は成人向けです。未成年の方はお読みになれません。
- ・この作品に登場する人物、場所、事象などはフィクションです。一部現実存在する物もありますが、関連性は全くありません。
- ・この作品には同性愛的表現が多数含まれています。



Heart♡1 見放された女

———— 車の音が遠ざかってゆくと、家の中に静けさが漂います。

エレン・コレットは自分を抱き締めるように両腕を廻し、夫が出て行ったドアを長々と見つめていました。

ラジオから微かにジャズが流れています。懐かしい歌声が奏でるのは『As Time Goes By』…別れた恋人たちが再会する歌。

" …そして恋人たちは求め合う、『愛してる』って言うまで… "

エレンは深く、深く、長いため息をつき、サイドチェストのラジオを切りました。

体がひどく重くなったようで亀みみたいにノロノロとしか動けません。それでいて足元は雲を踏むようにおぼつかないのです。

(どうしてこうなったのかしら…)

答えはすでに出ているのですが、エレンはそれを考えたいとは思いませんでした。ただ機械的に疑問が頭の中で繰り返されるだけ。空っぽの乾燥機のドラムのように…



キッチンへ行くと流しに溜まっていた洗い物を片付けます。それから洗濯物を自動洗濯機へ放り込み、掃除機をゆっくりと掛けて、隅々まできれいにしました。

本当なら泣きわめくべきなのでしょう。

けれど、エレンにはそれも空々しく感じられました。なんだか現実とは思えないのです。5分後にはロバートがヒョイと帰ってきて、『ハニー、ただいま』と優しく抱き寄せてキスしてくれる—— もっともそんな仕草はここ数年ご無沙汰なのですが—— 気がして。

一人きりの我が家は寒々しく、にわかに敵意を帯びているようです。人が居ないというだけでこんなにも怖いものなのかとエレンはゾクッとしました。

もっともロバートが家に居たことなどめったにありません。新婚の頃はとにかく、娘のアグネスが生まれてからというもの、彼の態度は徐々によそよそしくなり、やれ仕事だ付き合いだと言い訳をするようになりました。そしていつも家を空けていたのです。

ですから、今さら夫が居なくなっただけで何も変わらないのですが、それでも見えない存在としてのロバートは大きいのです。

ケトルでお湯を沸かすと、紅茶葉を用意し、手際よくお湯をポットとティーカップへ注ぎます。それから

茶葉をスプーンでポットに入れ、時計も見ないで正確に適切な時間蒸した後、カップへ注ぎました。お気に入りのビスケットと砂糖とミルクをトレイに入れ、テレビの前のテーブルに置きます。全てが流れるように自然で、美しいとさえ言える動きでした。でも本人はほとんど上の空…。

沈黙に耐え切れずテレビを点けて音量を上げます。大型のプラズマモニターの中でファミリードラマが展開し、空々しい笑いが響いていました。

エレンはぼんやりと焦点の合わない目で画面を見つめ、今晚の献立はローストビーフがいいかしら、それともテレビディナーで済ませるべきかしら…と考えるともなく考えていました。

まるで自分が空虚で、この家と同様無意味な存在だと思い始めた時 ——

そっ…

と、指がひとりでに^{うごめ}蠢きました。

エレンはソファにだらしなく座り、いつの間にか足を開いていました。

(……欲しいわ…)

無意識に舌舐めずりをしてしまいます。

そろそろと右手がお腹を滑り、太股を撫でていました。

股の奥から微かに感じる^{うず}疼き…

最後にロバートとSEXしたのはいつだったでしょうか。少なくとも5年は経っています。今のエレンにとって、夫との営みは恐竜時代ほど古い記憶でした。

誰にも慰められない股間に、エレンは少しずつ指を近づけ、スカートの裾をゆっくりとたくし上げ、その下の下着へ…

「——— ただいま」

玄関ドアが開いて、にわかにサッと光が差ししました。

ソファにもたれていたエレンがビクッと身を起こして振り向くと、そこに妖精が立っていたのです。

その妖精はキラキラ光る赤毛をショートカットし、濃くて短い眉毛の下に活発なグレーの瞳が輝いています。鏡のような美しい眼でした。

すらりと高い背は172センチ。Tシャツはサイズがきつめで、おへそがわずかに覗いています。というのも、組んだ腕の上に乗っかっている挑発的に突き出た乳房のせいで、身長わりにシャツが合わないのです。本人の控えめな証言によると、



胸囲85のDカップだそうですが、エレンが見るところ、本当は89のFカップなのだろうと思っています。

腰つきは細く、58センチ。お尻は82センチ。胸を除けば均整の取れた体で、7等身の両足はファッションモデルのように細く、それでいて力強さを秘めていました。

エレンの娘アグネス・コレットはそれでもなくても細い眼をいつそう細め、しばらくドアを開けたまま支柱にもたれ、母親をじろじろ見ていました。それから呟くように言ったのです。

「—— そう、出て行ったんだ」

アグネスの口調は冷静で、1グラムも驚きを含んでいませんでした。単に事実を確認しただけです。

妖精のような娘は、足を優雅に交差させて近づいてきます。（美しいわ）とエレンは、我が娘ながら驚嘆していました。どうして自分のような意思薄弱な女に、彼女のような娘を授かったのかしら？

「離婚の手続きは終わったの？」

ソファの隣に座りながらアグネスが尋ねます。

エレンは「離婚」という言葉にギクリとし、首を小さく振りしました。

アグネスはまた小さくため息をつき、

「…ママ、そろそろ現実を見なくちゃ」

「現実って？」

「あいつは出て行った。そしてもう戻ってこない。そうでしょ？」

「父親を『あいつ』なんて呼んじゃだめよ」

アグネスはイラッとしたように唇を噛み、肩をすくめます。

「他になんて言うの？お父様？父ちゃん？パパ？」

「アグネス」

「『彼』はわたしたちを捨てたのよ、ママ。ずっと前から。傷口に塩を塗りたくはないけど、何人の女と寝たのか数えてあげてもいい」

「アグネス！」

「女」の言葉を打ち消すようにエレンが鋭い声を上げました。

アグネスはにわかに悲しげな顔になり —— そうなるといつそう美しくなるのですが —— 、しおらしい態度になりました。

「…ごめんなさい、ママ。ママが一番傷ついてるのはわかってる。でも忘れないで。わたしがいるから」

突き出した胸に手を当てて、

「ずっとそばにいる。いつまでも」

「おお、^{スウィート・ハート}愛しい子…」

エレンは娘を抱き寄せました。そうすると突き出した胸と大きな胸が押し合い、二人の間で肉のクッションとなって潰れます。変な言い方ですが、娘の抱き心地はいつも最高でした。幼かった頃の^{きゃしゃ}華奢な体は母性愛を激しく刺激し、今こうして大人になった体はたと

えようもなく肉感的でスウィートです。時々、アグネスの素晴らしい肉体に母親のエレンは内心戸惑うほど圧倒されるのでした。

それと同時に、たった今慰めようとした股間が、またズキリと疼^{うず}きます。

(…まあ、なんてこと)

エレンは内心動揺しました。

自分が性欲の強い女であることはわかっているつもりです。でも、まさか、娘と抱き合^{たかふ}って昂るなんて…。

(いいえ、エレン、あなた夫に去られてどうかしているんだわ)

エレンは自分に言い聞かせました。もちろんマスターベーションの現場を見られそうになって慌てたことも事実です。今度から場所と時間は選ばないと。

それはともかく、アグネスは天使のような娘です。

「…ママもあなたを愛しているわ」

「わたしも、ずっとママを愛してる」

ふたりは抱き合い、慰め合いました。

けれど、その言葉が、ずっと深い意味を持っていることに気づくのは、まだ先のことだったのです…♥

Heart♡2 カレッジの女友達

アグネス・コレットは地元のコミュニティカレッジの学生です。専攻は経営学科でした。他にも芸術科や文芸科のクラスをいくつか受講しています。

彼女が4年制の大学を選ばなかったわけは、費用の点ではありませんでした。父親のロバート・ルーカスは成功したビジネスマンであり、始終国内を飛び回って仕事をしています。資産もそれなりにあり、従って離婚手当や子供の養育費を支払う義務にも十分対応できました。

ロバートは離婚する際、全てを手際よく進めました。自分の浮気が原因であることも自ら認めたほどです。妻の姓名を戻すことや、払うべき費用、謝罪として残してゆく家、世間体がビジネスに与える影響など、損得をバランスよく勘定し、きれいに清算してしまったのです…少なくとも物理的には。結局ロバートにとって家庭とはその程度のことであり、自分好みの女をベッドへ誘うことに比べれば大した犠牲ではありませんでした。

なので、アグネスが望めば、ちゃんとしたユニバーシティへ進学することも出来ましたし、彼女の学力なら可能でした。

けれども、アグネスにはひとつだけ大きな懸念がありました。母親のエレンのことです。

エレンは自立した大人ではありましたが、娘のアグネスから見れば、人に依存する度合いが少々大き過ぎるように思えたのです。こと男性に関しては依存度が大きく、だからロバートに去られた時はあれほどのショックを受けたのでした。

エレンはイエスウーマンではありませんでしたが、ロバートと暮らしたければ、そのふりをする知恵を心得ていました。貞淑な妻を演じれば家庭は保たれました、不倫なんて考えもしなかったのです。

皮肉なことに夫にとってはその点が飽き足らなかったようです。彼は恋愛に刺激を求めるタイプで、安定した家庭などというものは退屈な代物でした。

両者の違いは決定的なものでした。

若い頃ロバートは —— 今でもですが —— 旺盛な性欲があり、1日も抑えていただけませんでした。セックスが出来ないとイライラし、どうしても手近に女を置く必要がありました。まだお金のなかった彼は女を好き放題に選ぶ力はありませんでした。

そこで一番身近な同じカレッジのエレンに手を出し、避妊を忘れるという失敗を犯してしまったので

す。その結果アグネスが生まれ、否応なく家庭を持たなければなりませんでした。

一応ロバートにも責任を感じる能力はあり、彼なりになんとか家庭を保とうと努力しました。しかしロバートにとって素晴らしい女性たちとの出会いと、成功への飽くなき執念は捨てられないものであり、平穩な家庭という狭い世界とは相容れないものでした。

エレンは夫の成功を素直に喜びました。

けれども、それは同時に夫の止まらない浮気が続くということでもあり、彼女にはどうしようもないことでした。

エレンは泣き言をいう女ではありませんでした。ロバートのような男を繋ぎ止めておくには、非難よりじっと耐えて待つ以外に方法がないことくらい分かっていました。エレンは彼女なりに若く見られるようエステへ通い、ファッションに気を遣いましたが、それは年増女が若い女神^{ミューズ}に挑戦するくらい無謀な試みでもありました。

つまりはロバートは使い古しよりも、みずみずしく^{みだ}淫らな女の方がずっと良かったのです。

エレンはどちらかというと社交的であるよりも、平穩な環境を好んだので、両者の隔^{へだ}たりは広がる一方でした。

破局を迎えてしまった今、アグネスはエレンがどうなるのか心配でした。彼女の性格は母親似で、安定した家庭を好む傾向がありました。だからいっそう、母親の精神的不安定さが気がかりでした。

それだけが地元のカレッジを選んだ理由ではありません。

彼女は自分の生まれ育った町が好きで、他所^{よそ}へ行きたい気持ちはほとんどありませんでした。加えて…実はアグネスにも依存症がありました。それは他ならぬエレンです。

アグネスは母親から離れると不安になるのです。

自分ではひどく子供っぽいと思っていますが、この気持ちはどうしようもないものでした。エレンと一緒に居たいという想いは、他の何にも代え難かったのです。なぜこんな気持ちになるのか自分でもわかりません。

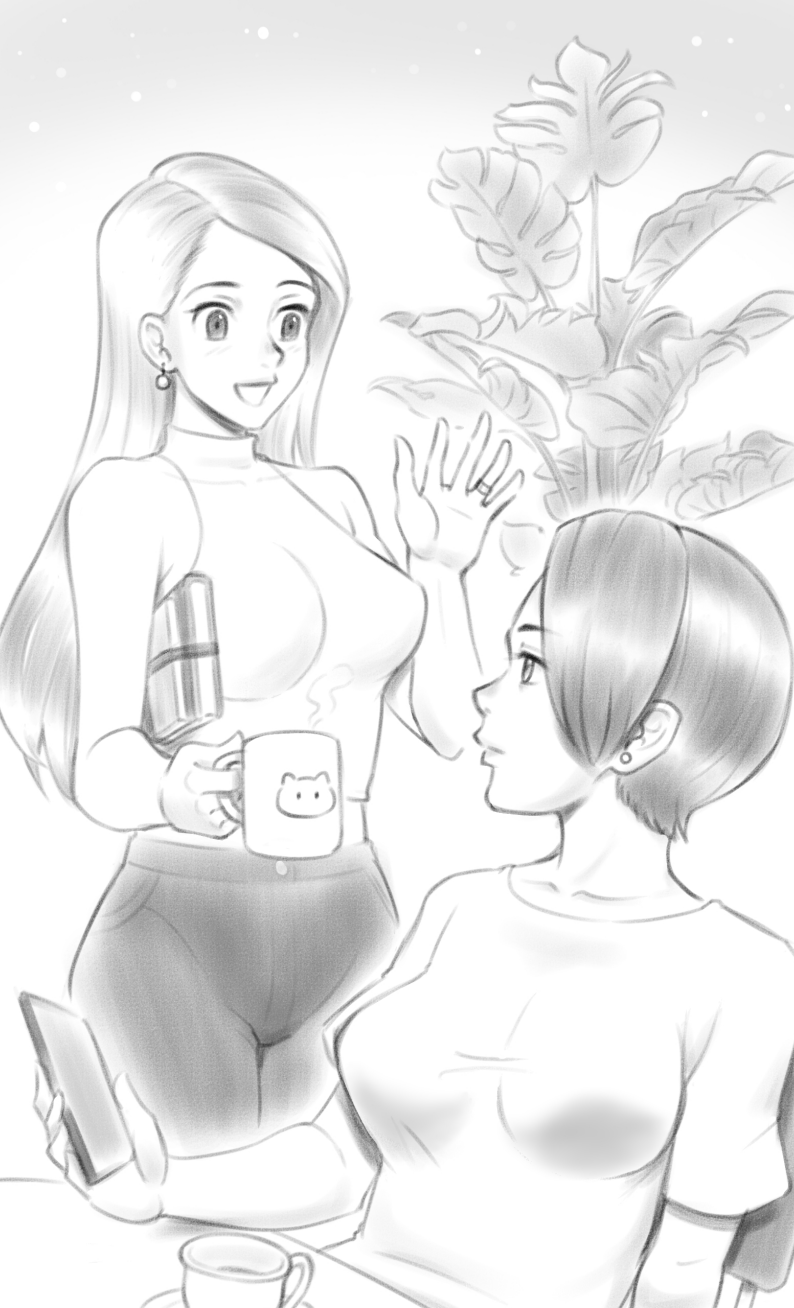
そういうこともあり、アグネスは母親のそばを離れたくなかったのです。

「—— ハイイ、アギー」

カレッジのカフェでぼんやりしていると、後ろから明るいい声がしました。

振り返ると、美少女がそこに立っています。

彼女はクリスティーナ・フローリン。



ブロンドの真っ直ぐなロングヘアと紅い大きな唇が魅力的な18歳。胸は自己主張するように突き出、ホルターネックの脇から乳房が幾分はみ出ています。

彼女は脇にレポート用の本とノートを挟み、カップチーノのカップを手にしていました。

クリスティーナの専攻は自然科学と化学と薬物学。古典文学科を受けているので、一緒になり、それ以来の友達です。

「なにぼんやりしてるの」

クリスティーナは向かいの席に着きました。

「…ああ、クリス。大したことじゃないの」

「『大したことだ』って顔に書いてるわよ」

ジョークを言いながらカップを啜^{すす}ります。

アグネスは首を振り、

「別にその、問題ってほどでも…ただママがちょっと心配で」

「気の毒だったわね」

クリスティーナは真面目な顔で頷きました。

アグネスは皮肉な笑みを浮かべ、

「『気の毒』の定義によるわね。わたしはハッピーエンドだって思ってるけど、ママにはこの世の終わりみたい」

「お父さんとはもう一緒じゃなの」

「離婚が決まった時点でサッサと引き払ったわ。前から準備していたみたい。手際がいいのよあの人、なんでもね…」

「それで、ミセス・エレンの…あ、違うか、ミス・エレンの様子は？」

「とにかく落ち込んでるわ。なんにも手につかないみたい。男が一人振ったくらいで、あんなにガッカリしなくていいのに…前から浮気してたのはわかってたし」

「でも愛してたんでしょ？ マジに気の毒だって思う」

「だったら続けばよかった？ 一生浮気され続けて…」

「まあ、そんなことは気にしない女もいるでしょうね、確かに。わたしだったら速攻で離婚だけど」

「あなたっていつもはつきりしているわよね」

アグネスはサバサバしたクリスティーナの性格をうらやましく思いました。そして、ふと彼女の左手に気づきました。

「アギー、彼氏できたの？ この前リックと別れたんじゃないなかったかしら」

「…ああ、これ？」

クリスティーナは左手の薬指に^は嵌まった銀色の指輪をかざしました。

その指輪は百合の紋章を彫ったシンプルなもので、二つの百合が永遠を表す『∞』のマークで繋がっていました。

「素敵ね…」

神秘的な輝きにアグネスは惹きつけられました。

クリスティーナは指輪を愛おしそうにそっと右手の指で撫で、囁くように言いました。

「……そうよ、できたの。恋人…」

クリスティーナの頬がほんのり上気し、瞳が輝いています。

「最高で、永遠のね…」

「全然知らなかった。どんな人なの。カレッジの男？」

すると、クリスティーナが意味深な笑みを浮かべました。

「男じゃないわ」

アグネスはまばたきし、その意味が分かるまで少し時間が掛かりました。それから口を『O』の形に開け、

「…まあ、それじゃ、女の人！？」

他の客に聞こえないよう、低い声で叫びます。

「まあね」

「知らなかった…あなたって、そのう…LGBTに属しているなんて」

クリスティーナが吹き出しました。

「属してるかどうか知らないけど、とにかく、パートナーはそうよ」

「え〜と…じゃあ、どんな…女の人？」

「歳上」

「どのくらい」

「そうね、母親くらいかな」

「え！？ あなた、年増が好きだったの？」

そこがカフェでなければ、クリスティーナは大声で笑ったでしょう。

「年増なら誰でもって意味じゃないわ。それに年増なんて失礼よ。だって『彼女』は最高にセクシーな女なんだから」

「へえ〜…そうなんだ」

「あ、でも、心配しないで。アギーもセクシーだけど、襲ったりしないから」

今度はアグネスが苦笑しました。

「それはありがとう」

「真面目な話、アグネス、わたし、彼女にぞっこんなの。彼女以外に欲しくないし、一生愛し合いたいって思ってる。分かるの。それが出来るのが…。

なんていうかな、運命ってやつ？ 本当」

今まで見たこともないくらい真剣なクリスティーナに、思わずアグネスは手を差し伸べていました。

「おめでとう。あなたが幸せでわたしも嬉しいわ」

「あなたって最高の親友よ…」

ふたりは手を握り合いました。

「それで話を戻すけど、エレンさんはどうなるの？」

「一応家は譲ってもらったし、養育費も離婚手当もあるから、当分食べてゆけることは確か。…でも、ママの精神状態がね…」

「カウンセラーに行ったら？ うちのママが良い人知ってるわよ」

「それもいいけど、わたしがそばについてやらなきゃ」

「アギーは母親想いだもんね…」

クリスティーナの言葉は微妙なニュアンスを帯びていました。アグネスは気づきませんでした。

「ねえアギー。あなた自身はどうなの」

「わたし？ わたしがどうかしたかしら」

「恋人とかいないの？ 誰かとつき合ってたって話聞かないんだけど」

「…ああ、そういえば。ママが心配で。あまり考えてなかったわね」

「アグネス。恋と母親は別物よ。一般的には」

「そうだけれど」

「誰か良い男でもない？ あるいは女でも」

「う〜ん…あんまり気にしたことなかったわ」

「ちょっと…まさか一人もいないっていうんじゃないでしょうね」

「え〜と待って、好きな男、好きな男……

…ああ、トム・クルーズかな。彼セクシーよね」

「それって映画スターで、彼もう60過ぎ」

「若い頃はすごくセクシーじゃない。『トップガン』
とか『ミッション・インポッシブル』とか」

「ああ、わかった。ようするに誰もいないのね。呆れた」

「なによ。じゃ、あなたに恋すればいいっていう
の？」

「わたしが言いたいのは、あなたが母親べったりで、
母親のことしか考えてなくて、それ以外に何もないよ
うに見えるってこと」

「それじゃダメなの？」

一瞬、クリスティーナは言い淀みました。それから
言葉を探し、苦笑しながら首を振りました。

「普通はそう。カレッジの学生にもなって親離れでき
ないっていうのはね。だけどわたしは…そう、お母さ
んが大切なら、もっともっと大切にすべきね」

「もっと？」

意外な助言に今度はアグネスが目をしばたたきました。

「これ以上何をするの」

「まあ、考えられるのは、地元就職して、エレンと
一緒に住んで、彼女が再婚したいなら応援して…」

『再婚』と聞いたとたん、アグネスが顔をしかめました。

「再婚？ たった今、浮気男から愛想尽かされたっていうのに？ あんなに夫一途なママが、男を欲しがると思う？」

「だって、娘なら母親に第二の人生を歩んで欲しいじゃない、普通？ 一度離婚したくらいなんだっていうの？ 人間何歳になっても恋をするべきだわ」

「悪いけどクリス、わたし、今一番考えたくないのは、ママの再婚話なの。身勝手な話だってわかってる。でも、もしまたロバートのような——自分の父親の悪口は言いたくないけど——腰の軽い男と結婚するなんて考えただけでもゾッとするわ」

「誠実な男性だっていくらでもいるわよ？ もう懲りてるんだから、学習したでしょ」

でもアグネスは強く首を振りました。

そんな親友をクリスティーナはますます意味深な目つきで眺めました。

「…わかった、プランBにしましょ。再婚はとりあえずゴミ箱に捨てて、アギーとエレンがもっと親密になるようなことをすればいいのよ」

「親密って？」

「そうね…例えば、恋話とか」

「クリス！」

「もちろん経験って意味じゃなくて、理想の男性、あるいは女性…まあとにかく、色んな意味で自分たちなりの恋ってやつを語り合うの。

もっと開けっぴろげでもいいわ。例えば、性教育に関するアレコレとか」

「…『性教育』！？」

叫びそうになってアグネスは自分を抑えました。
いったい彼女の友達は何が言いたいのでしょう？

「そうよ、性教育って重要よ？ だってそうでしょ？
人類が存続するには子供を産まなきゃならないし、子供を産むにはセックスしなきゃならないし、セックスをするには恋人がいなきゃならない。

最高の恋人を手に入れるためには、十分な知識と性欲が必要で…あ、ちょっと言い過ぎ。でも間違っていないけど。…で、親子ならなおさらざっくばらんにその問題を検討する必要があるわけ」

「…あなたって、時々おかしくなる気がするわ」

「失礼ねえ、わたしは正常よ。むしろ正常過ぎるくらいだわ。

だから性の問題は深く、たっぷり、話し合うべき。

例えば、そうね、女同士で子供を産むには遺伝子操作が必要かどうか、手段はどうするか、費用は…あ～それから、もっと突っ込んで、マスターベーションの問題とか…」

「…わかった、もう十分。応援してくれてありがと」

アグネスが手を上げました。

「真面目に聞いてよ。わたしの言うことが必要だって、今に絶対分かるから」

「うん、あなたが真剣なのは十分伝わった。もう少し考えさせて」

「…おっと、もう薬物学の講義の時間だ。もう行かないや」

クリスティーナが腕時計を見て立ち上がりました。

「クリスは薬剤師が希望なの？」

「ううん、ママの会社で研究員になりたいの！…じゃね！」

急いで走ってゆくクリスティーナを見ながら、（形の良いお尻だわ）とアグネスは親友の交互に揺れる豊かな肉丘をなんとなく眺め、慌てて打ち消しました。

（…まあ、本当に驚いた！まさかあの子が女の人と恋人だったなんて…しかも母親と同じくらいですって？ 世の中には奇妙なことが多いわ。…そうね、でも、嫌な感じはしないかな…）

自分のコーヒーは飲み干してしまったので、アグネスはクリスティーナが置き忘れたカップを取り、カプチーノを啜りました。

Heart♡3 母親のマスターベーション

—— さて、当然ながら、アグネスは家に戻った時、友達のこの衝撃的な告白を、エレンに言わずにはいられませんでした。なんといっても彼女の母親が一番の相談相手だったからです。

「ねえママ、どう思う？」

エレンはもちろん驚き呆れました。

クリスティーナ・フローリーとは何度も会ったことがあります。彼女はたびたびコレット家へ遊びに来ていたからです。それまで活発な娘だという認識しかなかったので、クリスティーナがレズビアンで、母親と同じ年の女性とつき合っている —— それもかなり真剣に —— という事実には衝撃を受けました。

「どう思うって、ママだってどう言ってもいいかわからないわ」

「わたし、クリスは良い子だって思ってたけど、分からなくなったわ」

「それはどういう意味？」

「だって、彼女ったら、わたしたちのことについて色々変なアドバイスするんですもの。性教育について話し合うべきだとか…」

「『性教育』！」

エレンが素っ頓^{とんきょう}狂な声を上げました。

「そうなの。女同士で子供を産む方法とか、おかしい事言い出すのよ。それに…それにね、わたしがママと親密過ぎるんですって」

「そんな事はないんじゃない？」

クリスティーナには好感を持っていますが、家庭のことをあからさまに言われて、さすがにムッとします。

「わたしはそう思わないけど、ママの再婚を応援すべきだとか…」

「私がいつ再婚するなんて言ったの？」

今度は、失恋の痛手を指摘されて、キツとなります。ロバートが去って時間も経たないというのに、他の男など考えられるのでしょうか。それでなくてもエレンは男性との出会いに恵まれていないのです。夫一途で過ごしてきた元人妻に、どんな出会いを求めろというのでしょうか。

「だからわたしもそう言ったの。パパみたいな腰の軽い男と添わせるつもりないって」

「アグネス。パパは腰の軽い男性ではなくってよ」

「ああ、そうね、そういうことにするわ。とにかく、今は再婚なんて考えられないってことでしょ？」

「そうよ。わたし、今は何も手につかない…」

エレンが手で顔を覆ってため息をつきました。

アグネスは優しくその手を取り、自分の胸に引き寄せます。

「大丈夫よママ。わたしはママの味方。もし…その、
本当にもしもだけど、ママが素敵な男性に出会えば、
わたし応援するわ。本当よ」

「スウィートハート…」

エレンは娘の優しさが身に沁みました。つくづくア
グネスを産んで良かったと心の底から思いました。…
それと同時に、娘の乳房が思いがけないほど柔らかく
豊かなのにドキッ♥としました。

エレンはアグネスに気づかれないよう、そっと手を
戻しました。

(…いやだわ、クリスティーナが変な事を言ったせい
で、私まで影響されたみたい。アグネスのおっぱいに
感じるなんて…)

あらためて間近で見ると、娘の巨乳は実に迫力があ
りました。大きめのサイズのシャツを着ていても、生
地を押し上げる逞^{たくま}しさと張りの良さは隠しようがあり
ません。みずみずしい若さと相まって、視線を吸いつ
ける魅力を放っています。

突然、エレンの口中に生唾^{なまつば}が溢^{あふ}れました。

今度こそエレンはギョツとして、激しく狼狽^{ろうばい}しまし
た。

(馬鹿な！ 私が娘に感じるなんて…)

エレンは精一杯の自制心を発揮し、娘に聞こえない
よう生唾を飲み込みました。ゴクリ…と微かな音が喉

奥で響き、身がすくみます。けれどアグネスは気づいていないようでした。

わずか数秒間の出来事ですが、エレンの心臓はにわかにドキドキし始めたのです。

（きっとフローリーの娘のせいよ。レズビアンなんてみんなおかしいんだわ）

アグネスはそんな母親の様子に気づいていませんでした。彼女なりに考え事があったのです。

「…それにねえ、ママ、クリスったらわたしに、恋人がいなかったって聞くのよ？ 男か、あるいは女か…ママが参っている時に普通聞くかしら？」

「え？」

エレンはドキドキを忘れて聞き直しました。

「アグネス、あなた、恋人はいないの？ そういえば…」

「ええ？ だってそんな余裕ないわよ」

「どうして」

「どうしてって、ママが四六時中パパに泣かされているからに決まってるわ！ わたし、ママのことが心配で…」

エレンが優しい顔つきになりました。娘の手を取り、

「アギー、アギー、わたしの娘…ママの心配なんかより、あなたの恋の方がずっとずっと大事なことよ。マ

マは一人でなんとかするわ。だから、あなた自身のことを考えなさい」

「『なんとかする』？ こんなに落ち込んでるのに？
それこそ無理難題よ」

「でも、あなただっていずれ結婚するんだし…」

「そうかもしれないけど、まずはママが先。ママが幸せになってくれなきゃ安心できないわ」

「困った子ねえ」

とはいえ、エレンはまんざらでもありませんでした。実の娘がこんなにも自分のことを考えてくれるのですから。

「だけど、本当にいないの？」

「ええ、まあ…」

「こんな人が良いなとか、そういうのも？」

「クリスにはトム・クルーズが良いって言ったわ」

エレンは笑い出しました。

「それは…ある意味で最高の答えだけれど、わたしより老けた男性は困るわね」

「実のところ、あんまり考えたことないの。…ねえ、ひょっとしてわたし、レズかしら…？」

密談するように顔を寄せます。

「ママに聞かれても」

「わたしがレズビアンだったらどうする？ ママはどう思う？」

『困るわ』と言おうとして、ふと、エレンはそれも悪くない…と思いました。

そういえばさっき、クリスティーナがレズビアンだったという話を聞いた時、歳上の女性とつき合っていることに驚きはしたものの、同性愛者だということは失念していたのです。レズかヘテロかは自分にとってどうでもいいことなのだとエレンは気づいたのです。

「…戸惑いはするでしょうね」

「それから？」

「それからって…特になにも」

「それだけ？」

拍子抜けしたようにアグネスが言います。

「あなたが良いと思った人が一番良いのよ。誠実な人であれば」

ごく自然にそう答えていました。

「…ああ、ママ、大好き♥」

アグネスが母親を抱き締めました。

ギュッ♥とされて、またエレンがドギマギします。巨乳同士が潰れ合い、昨日と同じく微かな快感を伝えました。

うろたえる母親は、それを隠すために、冗談っぽい声で言いました。

「アグネスったらどうしたの？ 私が何か言ったかしら」

「ママって最高ってこと。わたし、ママの娘で本当によかった」

「それはママだって同じよ。アグネスが私の娘で誇らしいわ。あなたはいつだって私を支えてくれたんですもの…」

「…これからだってよ、ママ。昨日も言ったでしょ、ずっとず〜っと愛してるって…」

「まあ、この子ったら」

ふたりは微笑んで軽くキスしました。

それはごく日常的な動作でした。

幼い頃から父親が不在がちの家庭で、母親と娘は必然的に親密になり、ハグやキスは当たり前のことだったのです。ですから、母娘が唇を合わせるという行為に、異常性があるとはつゆほども思いませんでした。

…それでも、今日のふたりは少し違っていました。

唇を離した後で、なんとなく微妙な空気がふたりの間に漂います。言葉に出来ない何かがあって、胸が微かに熱くなりました。そしてふたりは同時に思ったのです。

（（もう一度キスしたい））

けれども、それをするのは、何かためらいを覚えました。見えない庭の敷地へ境界を跨ぐ^{また}ような…。

エレンの唇から舌が無意識に這い出、チラッと一瞬舐めました。

それを見たアグネスは、母親の唇にむしゃぶりつきたいという激しい衝動を覚えたのです。娘はかろうじてそれを抑えました。

エレンはその空気を逃れるため、わざと明るく言いました。

「でも彼氏がいないって本当？」

「…ああ、マ〜マ！」

「まさか生まれて一度も？」

「そうよ、悪い？ わたしってそんなに^{うぶ}初心かしら。…どうして笑うの？」

「違うわ、ちょっと嬉しくって」

「『嬉しい』？」

「ああ違う違う、ごめんなさい、そういう意味じゃなくって…」

「じゃどういう意味？」

「そのう、怒らないでちょうだい。そんなに私と一緒に居てくれたってことが、とても嬉しいの」

アグネスは肩の力を抜きました。そして微笑んだのです。

「だってママの娘ですもの」

「世間ではいがみ合う親子もいっぱいいるでしょう？ それを考えると、あなたのような娘を持てるってことは、ほとんど奇跡よ」

「お世辞ありがとう」

「だけどねえ、アグネス、これから恋人を持つことも考えたら？ 私だって孫の顔が見たくなるかもしれないし」

「…そうね、男と寝て、妊娠して、結婚して、孫を産むのも悪くないかも」

どうしても口調がトゲトゲしくなるアグネス。

「そんなこと言わないの。きっとあなたにだって運命の人が現れるわ」

「そうね。そうかもね。…とにかく、白馬の王子様が現れるまでは、ママのそばに居るわ」

——— その夜、エレンは寝室で一人寝そべると、落ち着かなげに寝返りを打っていました。

キングサイズのベッドは夫の趣味でした。ここで何度ロバートと激しく交わったことでしょう。上になり下になり、あらゆる体位を行い、娘にはとても口に出せない卑猥なプレイも楽しみました。信じられないことに、ロバートは妻とこれほど激しい一夜を過ごしても、翌日の昼にはオフィスで秘書にデスクへ手につかせ、後ろから犬の交尾のように尻を犯していました。それほどの精力家なので、エレン一人に満足できないのは至極当然だったのです。

エレンは今36歳。

若くはありませんが、^{とう}臺を過ぎている年齢でもありません。むしろ夫に見捨てられないよう欠かさず肉体の手入れをしていたせいで、歳のわりにずっと若く見られるほどです。アグネスとは歳の離れた姉妹だと間違われたことさえありました。

そして性欲はといえば、若い頃のがむしやらな欲求に替わって、肉の底から湧き上がるような深い欲望が昇ってくる歳頃でした。一度子供を産んで子育てが終わると、かえって体が^{うず}疼くのです。それなのに肝心の夫は居ないのでした。

「ああ…欲しい…♥」

エレン・コレットはネグリジェを上へたぐり寄せ、寝巻の上から豊かな乳を左手でまさぐりました。そして右手を股間^{こす}へ伸ばし、ゆっくりとパンティの上から濡れた谷間を擦ります。

むっちりとした太股^{あら}がだらしく八の字に開き、パンティの黒い沁みを露わにしました。

コレットは乳房を根本から搾るように上へ持ち上げ、そのまま山の形にすると、人差し指で乳首を上から押し潰します。グリグリと円を描きつつ、残った指で押したり開いたりしながら、おっぱいを刺激するのでした。

右手の人差し指は肉の溝を上下へ緩慢に撫で、パンティにオマンコの形を浮き上がらせました。クリトリ

スのある辺りを爪で軽く引っ搔くと、クッと首をのけ
反らせ、甘いため息をつきます。

エレンの上気した顔が淫らに弛緩し、惚けた顔になり
ました。

昼間は貞淑な妻を装っていますが、エレンはもともと
性欲の強い女でした。一晩中セックスに耽つても疲
れ知らずだったほどです。

ロバートと結婚したのも、セックスの相性が良かった
せいもありました。若い頃のふたりは暇さえあれば
四六時中セックスし、夜の寝室に限らず、リビングや
キッチンでもお楽しみをすることが普通でした。夫は
いつも彼女を満足させてくれました。ですから、なお
のこと離婚が堪えたのです。

今は淋しさを噛みしめながら、オナニーに耽る毎
日。アグネスをカレッジへ送り出した後、1日中マス
ターベーションに励んだことも珍しくありません。快
楽だけがエレンの虚しさを一時的に埋めてくれるので
した。

右手の人差し指がパンティの下へ潜り込み、直接
陰唇に触れました。エレンのため息がいつそう深くな
ります。グデュグデュと卑猥な音を立てる肉の割れ目
に指を埋め、肉ビラを割って尿道口を指先でこね回し
ます。それからその下の肉穴へ滑り込ませました。も
ちろん膣口はとっくに開いています。

「…ああ！…ボビー！」

エレンはあえぎ、中指を加えると、本格的に肉穴をほじくり始めました。2本の指を鉤爪かぎつめのように曲げ、スキーン腺の辺りをまさぐると、Gスポットを攻めます。はつきりとエレンがヨガリ声を上げ、腰を浮かせました。そのままの姿勢で左手を動かし、パンティを慣れた手つきでずり下ろすと、勃起したクリトリスを摘みました。とたんに低い悲鳴が起こり、エレンは弓反りになって悶えたのです。

「ああっ♥ああん♥」

驚くことにその部分は丸見えでした。

一本の陰毛もない完全なパイパンだったのです。

散々使い古した女性器が黒ずみ、大きな大陰唇を開いて、少しばかりグロテスクに咲いています。クリトリスは異常に大きく、包皮を剥いた状態で丸々2センチもありました。極小サイズのペニスといった風情で、真上を向いて勃起しています。

そこをこね回すと当然凄まじい快感に襲われ、目の裏に星が舞うのです。

エレンは勃起クリトリスを指で挟んだり、押し潰したり、爪で軽く引っ搔いたり、様々なテクニクを知っていました。むしろ膣穴を掘るより、肉豆をいじの方が気持ちよかったです。

こうなったのもロバートのせいで、猥色家の彼は妻に対しても淫乱になるよう要求しました（反面、不倫は絶対許さないと公言したのですが）。

性器を密着させるために永久脱毛処理させ（もちろん彼もです）、クリトリスを集中的に虐めて、性具を使って拡大させたのです。

おかげでエレンはすっかり開発され、体の隅々まで自分の性感帯を知り尽くしていました。どうすれば膣が締まり、男を気持ちよくさせるかよく分かっています。フェラチオも得意で、手錠プレイなど軽いSMさえ経験済みでした。ことセックスになると、夫婦は半端でなくのめり込んだのです。

「！つくううううううう♥」

ビクッ、ビクッ、と大きなアクメが走り抜け、エレンはベッドへ背中を預けました。力が抜け、乱れた呼吸が部屋に響き、汗が額を流れ落ちます。

（…こんなものじゃ足りないわ…）

エレンは天井を見つめました。

どうしたとか、今夜は異常に^{たかぶ}昂っています。

勃起した乳首がネグリジェに^{こす}擦れて痛いので、彼女は寝巻を脱ぎ捨てて全裸になりました。

スルッ…

^{きぬず}衣擦れの音とともに見事な肉体が現れました。

165センチの背丈に熟女の肉体美が映えます。腰回りは67センチ。娘のアグネスほど腰はくびれていませんが、そのかわり、胴回りの肉付きはほっそりした少女とは比べものにならない肉感に溢れています。軽く腰を屈めると肉のたるみが皺となるところなど、熟女らしい淫猥さが浮き出ています。

それよりも目につくのが乳房。その量感たるや圧倒的で、間違いなく胸囲100センチはいつているでしょう。若い頃はツンと上に尖っていたおっぱいも、歳を取るにつれて下へたるんでゆき、今ではスイカを吊ったような垂れ乳に変わっています。経産婦らしく乳首の周りは黒ずみ、勃起乳首も大きく、いかにも子供にミルクを飲ませた女ならではの淫靡な眺め。

エレンが伸びをすると垂れ巨乳が誘うように揺れ、永久脱毛できれいに処理した腋と合間って、素晴らしくセクシーでした。

95センチのお尻は張りがあり、太股もそれに比して直径があります。内股の肉づきがまたいやらしく、動くとき微かに揺れる柔らかな筋肉が仄かな色気を漂わせています。

ややくすんだロングの赤毛は室内の灯りを受けると艶やかに輝き、唇は控えめながら吸いつきたくなくなるような媚びを帯びています。しっかりと太い眉毛の下に娘よりも濃い灰色の瞳。

エレン・コレットは誰が見ても魅惑的な肉体の持ち主でした…本人がそう思わなくとも。

エレンはベッドから降りると、小さな鍵でナイトテーブルの引き出しを開けました。

中は大人のオモチャがぎっしり詰まっていました。クリトリスに充てる小さなバイブレーターや、各種ローション、手錠、柔らかな鞭、大小のディルドー。アグネスには見せられない秘密の小道具。

そこから極太のディルドーを取り出します。直径5センチもある代物で、長さは20センチ近く。黒味がかった肌色のシリコン製で、擬似的な血管が浮いています。凶悪な外見とは裏腹に素材自体は柔らかく、嫌なベトつき也没有せん。

エレンはこの黒いディルドーがお気に入りでした。というのも、夫もこれに近いサイズだったからです。体調がすぐれない限り、いつもこれを使っています。並のサイズでは開発された膣穴は満足できないのでした。

寝そべったエレンが両足を大きく開きます。ヨガをしているので股関節は柔らかく、ほぼ180度に開脚できるのです。そうすると股間の性器と尻穴は丸見えでした。

エレンは右手に持っていたディルドーのスイッチを入れました。グイングインと微かなモーター音とともに偽肉棒がいやらしく回転し始めます。それから亀頭を濡れた膣口に当てがい、注射器を打つように沈めて

ゆきました。極太の偽ペニスが膣口の肉を押し広げ、徐々に埋め込まれてゆきます。エレンは深いため息をつき、満足そうに腰を震わせました。

ディルドーはどこまでも進んでゆき、ついに根本まですっかり埋まりました。夫の巨根を受け入れてきた彼女にとっては、ごく当たり前のことです。しばらく肉棒の感触を味わった後、おもむろに抽送を開始します。始めはゆっくり…少しずつ…愛液に濡れたシリコンのペニスが肉をめくって現れる様は、恐ろしく卑猥でした。

エレンは軽く腰を浮かせ、ディルドーを突き刺すスピードを上げてゆきます。グチュグチュと泡立った音が響き、肉襞から少し濁った液体がこぼれ落ちてゆきます。それは尻穴で一旦溜まり、大きな滴となってシートへ落ちました。シートの汚れが大きくなり、ギシギシとスプリングが軋みます。

「おお！ファックして！ファック！」

あられもない言葉を叫びながら、エレンは腰を振り立てました。太過ぎる怒張が激しく出し入れされます。亀頭に膣奥から掻き出された愛液が泡となって膣口の周囲を覆い、フェロモンを臭わせています。腋からも乳房の下からも汗をしたたらせ、36歳の熟女は肉欲のままに自分を犯していました。

同時に空いた左手の指で大きな勃起クリトリスを掻き鳴らします。痛いほどに勃起を摘むと、凄まじい快感が走り抜けました。

「ああ！ファックよ！もっとファックして！めちゃくちゃに！」

いつも以上に感じ、一瞬エレンは軽い恐怖さえ覚えました。

（ど、どうして…？ものすごく感じるわ！今日アグネスの話を聞いたせい…！？）

その時、ふいにアグネスの横顔が脳裏をよぎりました。なぜかエレンは娘の若々しい肉体を想像し、炎のような欲望が燃え上がったのです。

その瞬間、肉体の中でエクスタシーが爆発しました。

「ああ —— つ！アグネスウ —— ツ！！」

グウッと背中がアーチを描き、激しく痙攣します。ほとんど爪先と後頭部だけで体を支え、斜め上を向いた性器から潮がディルドーと膣口の隙間から噴き出しました。

「ああ！アギー！！アギィィィ！！！」

ほとんど白眼を剥き、自分が何を言っているのか分かっていません。陸へ釣り上げられた魚のようにビクンビクンと震え…ついに気絶してしまいました。

両足を投げ出し、エレンは死んだように横たわって
いました。股間には突き刺したままのデイルドーが
ウィンウィンと回転しています。それも気づかず、彼
女は深い満足の闇に沈んでいたのです。

…ただひとつ、エレンが犯した間違いは、ドアを
しっかり閉めていなかった、ということでした…。

<本編に続く♥>

